

遠州 ぶらりひとり旅

平成 26 年 6 月 10 日 (火) <静岡県で一番低い山 根川山 (ねがわやま) >

6 時 39 分発の千葉北ライナー (高速バス) で東京駅へ。車中で朝食を摂った後居眠りでも・・・と思っていたが、道路が空いているせいで目も閉じぬ間に八重洲口に着いてしまった。時間潰しにコーヒータイム。

8 時 26 分発こだま 639 号、名古屋行なのでさほどの混雑もなく静かで良い。

浜松着は 10 時 23 分。すでにカンカン照りの状態で、28℃ぐらいありそうな感じがする。天気予報によると明日は雨のようなので、今日一日の晴天をうまく使って効率良く動くことにした。

駅前の日産レンタカーでモコを借り、カーナビゲーションを佐鳴湖 (さなるこ) 公園に設定して 11 時前に出発。走り始めたが暑さにたまらず近くのセブンイレブンに飛び込み、駐車場で半袖ポロシャツに着替え。県道浜松雄踏線を西へ、入野で北に進路を変えてしばらく進むと佐鳴湖を右手に見るようになった。やがて道はすぐに左に小さな起伏、右に湖を見る遊歩道を兼ねた歩行者最優先の「最徐行道路」になった。

案内表示に導かれて「ひょうたん池駐車場」に入り、歩行を開始。

ヨシキリのひときわ大きな鳴き声に誘われて根川湿地・ひょうたん池を見た後、地図を片手に「目指す目標」への道を探していると、池の向こう岸に真北に登る階段付きの小道が現れた。地図と磁石とで確認すると方角は間違いないので登って見ることにした。斜面に取り付くと、木漏れ日がきらきら光る程度で直射日光の湖畔とは打って変わった涼しさでホッとすする。急登が終わると道は斜面を巻くようになり、やがて鞍部のようなところに出た。しばらく進むと鼻が欠けた犬の置物があり、北に進むとすぐに看板が建つ頂上に着いた。時計を見ると 12 時 09 分、「根川山 (32m) 静岡県で一番低い山・・・」と説明が書いてあり、風化して文字が判読ができない歌碑があるだけの静かな山頂だった。

写真撮影をして、お茶を一口飲んだだけですぐに出発。稜線上を進むと北の鞍部から東側 (湖畔) に向かいそうな道を見つけた。気持ちの良い斜面林をゆるやかに下ると 10 分もせぬ間に湖畔の周回道路に着いた。そこには何と「根川山登山口→」の標識があった。

湖畔の散策をした後、次のターゲットは根川山の北にあるはずの 33.3m の三角点。少し北側に歩くと湖畔から山に入って行く立派な道の分岐点を見つけた。ロープが張られて通行止めの表示が付いており、車は入れないようになっている。道は緩やかなカーブを何度か繰り返しながら登って行き、すぐに広い山頂に到達することができた。駐車場らしい平坦地と、ヘアピンカーブの先に芝生の広場が見える。「三角点がある場所」を地図で確認しながら進んで行くと、芝生の広場の一角に白い標識とその足元の小さな石柱が立っていた。海拔 33.3m の三等三角点は、燦々と降り注ぐ日差しを浴びて凜としていた。時計を見ると 12 時 40 分、にわかにおなか为空いてきたが付近に売店はないので、駐車場に戻ってお茶を飲んでひと休みだけ。

本日のメインイベントはこれにて終了。午後からは浜名湖周辺のドライブをすることにして、移動開始。最初の目的地は弁天島。あの巨大な浜名湖が遠州灘と接するところを見に行こうという趣向。途中で見つけた石窯パン工房と称する店で昼食。

この複雑な形をした 65 平方キロほどの広さの汽水湖が遠州灘と接する部分はわずかな距離にすぎない。海水の干満によりこの接点となる場所には大きな潮の流れが発生する。真上から見下ろすと、鳴門の渦潮にも似た「地球が生きている」と実感できる面白さがある。

次は浜名湖の奥に位置する館山寺へ。一言で浜名湖と片付けてはいけない。弁天島から三ヶ日・館山寺まで、それは大きな景観の違いがある。飛行機の窓から眺めて感嘆する浜名湖の形の面白さを車で走って目で見て手で触って・・・あらためてその奥行きに驚いた。

館山寺から再び遠州灘に戻って、今日の最後の見学地は中田島砂丘。

目の前の太平洋につながる海は、無限大の広がりを感じさせる。その広がりの前に灰色の砂浜が広がり、波打ち際までたどり着くのに一苦労するような奥行きだ。

浜松駅の南口には「砂山」という地名がある。風に運ばれた砂がここまで及んだということだろうと思う。

そして、東海道線の車窓から見る畑の土は灰色の砂の色をしている。砂との戦い、砂との共存の上に成り立つ浜松なのかもしれない。

ホテルにチェックイン後レンタカーを返して、夜は15年ぶり位になる旧友と再会。愉快的雑談と適量の酒で旅の初日は終了。



平成26年6月11日(水) <天竜浜名湖鉄道の旅>

予想通り朝から小雨が降っている。朝風呂、朝食を済ませて浜松駅へ移動。帰宅用の荷物はコインロッカーにしまって、行動用の軽装備で浜松9時23分発豊橋行に乗車。

新所原9時47分着、天竜浜名湖鉄道(地元では略して天浜線(てんはません)と言うらしい)掛川行は10時24分発。一日フリーキップ(1,700円)を買ってベンチで待っていると、すぐ横の東海道線の線路を掛川行が走って行った。

(右写真:東海道線新所原駅・左奥に天浜線新所原駅)

天竜浜名湖鉄道はディーゼルカー一両編成でワンマンカー、線路は単線。駅近くの家々の軒先をかすめるように走り始め、小さな切り通し

を抜けると水田が連なる平野に飛び出して北東に向かって一直線。一両編成独特のレールの響きが心地よい。大森を過ぎると進行方向を真北に変えて、知波田(ちばた)で浜名湖の西岸に辿り着く。ここは松見ヶ浦という小さな入江になっている。西側に湖西連峰が走り、その尾根が北に走り東に回り県境の稜線となって風除けになっているのがわかる。湖西の海拔数百m程度の山並みが小雨に煙り、美しい緑の膨らみを見せてくれている。知波田を過ぎると湖畔を離れて走り、尾奈(おな)で再び湖岸に近づく。

尾奈を出ると北上の後、三ケ日(みっかび)で東に向きを変える。

三ケ日着10時44分、一回目の途中下車。次の列車まで一時間あるので、あてもなく歩いて見ることにした。





猪鼻湖の畔を通るサイクリング道路を歩いて見たが、途中で雨足が強くなってきたので諦めた。岸辺の草むらから何やら怪しげな物音がするので覗いて見たらカニの大群が水辺に向かって歩いていた。

(右写真：三ケ日駅から徒歩 15 分の猪鼻湖)



早い昼飯でもと思ったが、食事ができそうなお店が一軒もない。仕方なくセブンイレブンでコーヒーとお菓子を買って駅舎の中でおやつ。次に降りる駅は「飯が食べそうな街」とすることにした。(左写真：三ケ日駅で掛川行を待つ新所原行)

三ケ日 11 時 42 分発、都筑 (つづき) までは猪鼻湖の北岸を走る。左側 (北側) は山、南側が湖、寒風から



守られた地形になっており、これが三ケ日みかんを育てているのだろうか。やがて線路は湖畔から遠ざかって行くが、寸座 (すんざ) で再び水辺に戻る。引佐細江という大きな入江を最後に浜名湖から離れて東北東に進路を取る。左には低い山並み、右には田畑が広がり優しい田舎の景色が続くが、食事ができそうな町並みは全く現れない。無人の駅と適当な間隔で並ぶ集落と豊かそうな田園風景には外食店など不要に違いない。気賀 (きが)、金指 (かなさし) など気になる名前の駅、来ては去る車窓の景色にしばし見入っている内に時々とうとう・・・。西鹿島 (にしか

じま) は浜松から来る遠州鉄道の終点でもある。乗り換え駅なので食事ぐらいできるのではないかと目を凝らしてみたが、赤紫の遠州鉄道の車両が一台停まっているほかには何もない駅だったので下りるのは止めた。そうこうしている内に天竜川を渡って二俣本町 (ふたまたほんまち)、ここも何もなし。次の駅は天竜二俣 (てんりゅうふたまた)、ここは国鉄の時代には拠点駅だったし、今では天竜浜名湖鉄道の本社もある有人駅。ようやく昼飯にありつけそうな気がして下車。

駅舎の隣に食堂があった。12 時 46 分、昼食をとる人々でごった返しているののでしばらく散歩をして時間を潰すことにした。他にも食堂はないだろうか、駅前の県道を右へ 1.5km ほど、戻って左へ 1.5km ほど歩いて見たが営業している店は一軒だけだった。双竜橋という名前が気に入って橋を渡って見たが、雨がひどくなってきたので駅に戻り、駅舎の隣の食堂に入って昼食。昼休みの混雑は終わったようで、店内にお客は一人しか残っていなかった。餃子定食を食べてひと休みするとちょうど次の列車の時刻になった。(右写真：風格の漂う天竜二俣駅)



天竜二俣 13 時 48 分発。雨にも濡れたくないのでここから先は車窓の景色のみということにした。軟らかな曲線の山並み、広がる畑、点在する集落、雨も風情のひとつとして加わり、柔らかい「日本の田舎」らしい



風景が続く。(左写真：これぞ日本の田舎風景)

遠江一の宮 (とおとうみいちのみや)、遠州森 (えんしゅうもり) など散歩しても悪くないような佇まいの駅はあったが、時々居眠りしながら景色を楽しむのも悪くない。

時折車窓に茶畑が飛び込んで来るようになり、徐々に人里が多くなり、新しい家が目立つようになり、東海道線の線路のわきに合流する

ように入れば終点の掛川駅。JR 掛川駅の北口に隣接した小さな建物が終着駅の駅舎だった。

東海道線で浜松まで行き、土産物を買った後コインロッカーの荷物を出して、17 時 20 分発こだま 668 号東京行を待った。

以上

### <Appendix> 旅の雑情報

浜名湖・佐鳴湖は縄文時代後期に海から切り離されて出来上がり、淡水湖となった。浜名湖は1498年の大地震やその後の暴風雨の影響で海岸線が切れてしまい、汽水湖になったと言われている。これにより浜名湖の水位は海面の水位の影響を受けるようになり、佐鳴湖も川を遡る海水の影響を受けて汽水湖化することになった。佐鳴湖東岸にある蜷塚古墳が、縄文時代から貝の採集や漁業が行われていたことを示している。

天竜浜名湖鉄道は、国鉄分割民営化で生まれた第三セクターによる鉄道。国鉄時代は二俣線と言った。浜名湖と天竜川とを眺められるのが特徴。その昔、二俣から飯田線の中部天竜までの路線が計画されたこともある。天災によって東海道線が不通になった時に、代行路線として東海道線の特急列車を走らせたこともあるらしい。

